

# 環境保護活動家たちと 手を結ぶべきか手を切るべきか

## To build bridges, or to burn them

Nature Vol.443(481)/5 October 2006

論説

科学技術に苛立ちを強めている環境保護活動家たちを、理屈が通じない相手として退けるべきではない。

「誰の意見も等しく貴重だとは限らない。」

もしこの言葉が驚きをよぶとすれば、それは、教室の中やラジオのトーク番組、ブログや政治活動などで、誰かがいった独断的な意見にもすべて価値があるとみなされる文化が存在していることの証である。こうした文化が、科学研究施設への放火など各種の戦法を用いる少数の環境保護団体を生み出したとっては誇張になるだろう。しかし、両者はつながっている、という主張は確かにできる。

*Nature* 10月5日号には、米国北西部での過激な環境保護運動に関する記事が掲載されている。それによると環境保護活動家たちは、彼らが望ましくないとみなした研究を行っている研究施設を襲撃したとされる。この襲撃に実際に関与した人々の数は案外少なかったが、彼らの支援母体はかなり大きい。

環境保護研究に携わる科学者は、この大きい支援母体との対話を維持すべきである。ただし、それは容易なことではない。感情的な議論に対して上から物をいう態度、もしくは懐疑的な態度を少しでもみせてしまえば、論理性があいまいでも非常に固い信念に支えられている一部の世論は、直ちに遠ざかっていくだろう。

問題の襲撃事件の実行者たちは「地球解放戦線」(ELF)のメンバーだと名乗っている。彼らが放火したのは、例えば樹木の遺伝子操作や野生動物の間引きにかかわっていると彼らが確信した研究施設だった。彼らの動機はまず間違いなく、問題とする科学研究の倫理性に関する自分たちの判断が他のすべての人々の判断に勝る、という信念からきている。おそらくそれに加えて、犯罪行為そのものがもたらすスリルもあっただろう。

### 感情的な反応

ELFの公式声明や著作物、その犯罪行為の支援者とのインタビューなどをみると、多くのこうした活動家たちが、直感や感情的な反応、個人主義にあまりにも大きな価値を置き、その中で堂々巡りをしていることが明らかである。この種の活動家は、ロマン主義の情熱的なアメリカ人だとみることもできよう。ただし、崇高なものを単にあがめるだけではすまず、それを守るために他者を攻撃しようとするところを避けばの話だが。

活動家たちのこうした見方が科学的方法と衝突することは、しごく容易に想像できる。科学的方法とは、感情を排して客観的計測と合理性を優先するものであり、また、自らも批判的審問を受けることで前進するものだからである。

しかし、この内在していた衝突が、多くの過激な環境活動家がイメージする科学者像によってさらに大きく燃え上がり、膨れ上がっている。彼らは科学者を、事実を装った見解を表明する抑圧的なエリート階級だとみているのだ。こうした科学者の見解は、金持ちや権力者の利益にかなうように簡単にねじ曲がるものだと、活動家の多くが感じている。また、社会問題を科学的に解決するともてはやされたもの（例えば DDT、サリドマイド、原子力）が、うたい文句通りの成果を上げなかったと考える活動家もいる。そのため、この新世代の環境活動家の多くは、科学技術に対して深い不信感を抱いている。

研究所やその他の標的への襲撃を引き起こす少数派の新世代活動家たちには、若さ、情熱、そして抑えきれない自信がある。彼らは憤りを感じており、理想主義的で、自分のなすべきことを感じ取り、切迫した気持ちになっている。そして、自分が正義のために戦っていると考えており、そのためにはもはや科学を必要としていない。この点は創世記を信ずる人々と似ているが、これ以外の点で両者の間に共通性はほとんどない。こうした環境活動家の場合、真実とは自らの心の中から聞こえるものだ。そして彼らは、個人主義的で相対主義的な文化において、自分たちの意見も他人の意見も等しく正当だと考えている。彼らは一部の研究を認めず、特に遺伝子操作や動物実験が関係するものはいっさい容認しない。そこで、「ドッカーン」とやるわけである。

こうした過激な活動を支援する数名の話によれば、長期にわたって辛抱強く行われた野外研究やコンピューターモデル、入念なデータ探索などは軽蔑の対象でしかないのだという。環境は危機的状態にあり、今こそ行動の時だと彼らは話す。彼らの中には、科学それ自体に、維持するだけの価値がないと考えている者もいる。科学とは、芯まで腐った文明の一側面だ、と彼らは考えているのだ。

### 主張の応酬

科学的方法と真っ向から対立する規範があり、それが長年の熱狂的な主張の応酬を通じて強化されてきたコミュニティの人々に対して、なぜ科学者のほうからわざわざ対話をもちかけるべきなのだろうか。それは、この集団がもっと大規模な環境保護運動の内部に影響力をもっており、したがって今日の政治状況において強力で建設的な要素となる可能性を秘めているからである。

科学界がこのようなむずかしい領域に対して影響力を保持するための最も有力な手段は、自らのありのままの姿を学校や大学、テレビ、そしてインターネット上で熱心にたゆまずみせていくことである。その姿とは、エリートが上意下達で決めた一連の規範などではなく、人類が直面する困難、もしくは解決困難に近い山ほどの問題を調べる一連の方法である。

科学界とその支援者は、例えば自然の生息環境がどう機能しているかを知るうえで、科学がいかに関与するかを強く主張すべきである。そうすることで、科学の本質的要素がじっくりと育まれることになる。冷静さと補足説明を十分に伴えば、ときには科学も政策立案者の心を動かすことができる。また、技術の中にも貴重な資源を浪費しないですむものがある。こうした技術の多くは、むしろ貴重な資源を節約してくれるだろう。

過激派の中でも過激な ELF と「動物解放戦線」(ALF) の信奉者は、決して納得することはないだろう。しかし、それほど過激ではないが環境について積極的に考えている支持者たちは、もっと大きなグループを形成しており、各地でデモ行進に参加し、科学に対する見方も共通している。もし研究者が感情的な主張を鼻であしらうことをやめ、科学の窓を通してみれば、この世界がより明確に見えることを実証していけば、このグループにいる大勢の人々が科学に抱く考え方を変える可能性は高まるだろう。 ■